

発刊によせて

エヴゲーニイ・I・クチャーノフ
水船教義 中里真紀 訳

東洋哲学研究所の川田洋一所長のもとで活動している、同研究所ロシア・センターの江藤幸作氏より、西夏文『法華経』に一文をとのご依頼をいただき、誠に光栄に思う次第である。

西夏文字で書かれた文献や文書、西夏の人々の歴史と文化、そして西夏王国(982-1227)の建国について研究する西夏学は、20世紀にいたって東洋学の独立した一分野となった。涼州の石柱の碑文や居庸関の刻文を比定するための努力を別にすれば、この新しい分野にとっての推進力となったのが、他ならぬ『法華経』だった。そしてこのたび、その西夏語訳が出版のはこびとなったのである。

1900年8月1日に8カ国の連合軍が北京に出兵し、義和団事件を鎮圧した後、後に偉大な中国研究者となるポール・ペリオなど、3人の中国駐在のフランス大使館員が、元代(1271-1368)に造られた白塔の周辺を歩き回っていた。そこに散乱していた文書やごみのような物の中から、ほとんど知られていない西夏文字で書かれた、6冊の書物を彼らは発見したのである。その写本は非常に高品質のもので、きちんとした筆跡で、美しく浄書され、金色の文字で黒地と白地の紙に書かれていた。中国の仏教書が伝統的に用いてきた折本式の装丁になっていることから、この書物は明らかに仏教的な内容をもつものであった。3人は当初、ポール・ペリオ、M・モリス、F・ベルトーがそれぞれ2冊ずつというように、これらの書物を均等に分けたようである。しかし理由は定かではないが、——おそらくペリオが彼の取り分を放棄したのであろう——最終的には、モリスとベルトーが3冊ずつ分け合った。

有能な中国学者であったモリスは、西夏文字の横に書かれた漢字——「あるいくつかの〔西夏〕文字の右側に、明らかに漢人の手によって、それに相当する

漢字が書かれている」¹⁾——をもとに、テキストの内容が『法華経』であると比定した。モリスは、大胆にも19世紀末にG・ドゥヴェリア、A・ワイリー、S・ブッシュェルがもたらした、西夏の文字に関する知識を拠り所として、この經典の漢文と西夏語のテキストの比較を行った。このモリスの試みは、最初の、唯一の忠実な西夏文書の解説作業となったのである。

モリスは、西夏文字が表音文字であるとする、それまでのドゥヴェリアの主張を支持せず、その表記方法は漢字を基にしてつくられた表記体系であるとの正当な断定を下した。彼は、西夏文字に転写された固有名詞を〔それに相当するもとの〕漢字と比較することによって、数十の文字の意味とほぼ正当〔であろうと思われる〕読みを確定し、いくつかの文法的〔機能を有する〕字句を同定し、西夏語をチベット＝ビルマ語族の一つであると断定し、先行する目的語に続いて動詞が文末に置かれ、修飾語は被修飾語の後に置かれるという点で「チベット語が、〔西夏語と〕類似した文法的事象をもつ言語である」²⁾と指摘した。³⁾

モリスはこの文書、あるいはその他の西夏語文書にそれ以上の興味を示さなかった。そして1912年、〔所蔵していた〕3冊の『法華経』の折本をベルリン〔の国立〕図書館に売却した。F・ベルトーは、3冊の折本を「珍品」として保管し、それらを研究することはなかった。死後、彼の妻は3冊の折本をそれぞれ別の人に売却してしまった。後に、フランスの学界のイニシアチブによって、3冊ともにそれぞれのコレクターから取り戻され、ギメ美術館に収蔵された。これら、1900年にフランス人によって発見された『法華経』折本は、現在もフランスとドイツで所蔵されているようである。ドイツ所蔵のモリスの写本は、後にドイツの中国学者によって研究された（1919年、A・ベルンハルディとE・フォン・ツァッハ）。フランスで所蔵されたものは学者たちの関心を引くことはなかったようである。

1914年、中国の学者羅福成は、モリスが公表したテキストと日本の羽田亨教授が提供したモリスの折本の写真をもとに、「西夏訳法華経の研究」を出版した。⁴⁾

1907年から1908年にかけての、Ts・バドマジャポフとP・K・コズロフによる、ゴビ砂漠の南端、エチン・ゴール川河口部に位置するハラホト遺跡の発見は、当時揺籃期にあった西夏学にとって転換点となった。1190年刊の西夏語語彙集、木版本『番漢合時掌中珠』〔の発見〕は、西夏語文献解説の障害をかなり軽減するものであった。〔しかし、〕主として翻訳されたテキストを読んで語彙資料を集

積していくという問題、音声の再構成作業、すなわち近代音声学の助けを得て、漢字とチベット文字による表音と陀羅尼テキストを解釈していくこと、西夏語文法の記述といった[課題]が残された。これらのすべてが、確実に多年にわたる労作業を必要とするものであったが、現存するおびただしい量の文書によって、これらの課題は十分に達成可能なものになったのである。世界の西夏学の専門家の小さな共同体が、このような目標を目指して研究を続けている。

今回の出版本に関して重要な点は何であろうか。第一に、西夏学は『法華経』のテキスト[研究]から始まったのだということは、確信をもって言うことができる。

第二に重要な点は、今回出版になる『法華経』のテキストは、その特徴から見て一番最初ではないにしても、早い時期に西夏語に翻訳されたものの一つだということである。朝鮮[・韓半島]と日本がアジア史の舞台に登場し、朝鮮[・韓半島]、日本、そしてベトナムで、唐代(7-9世紀)までに漢字が採用され、国家および、倫理・道徳のイデオロギー的基礎としての仏教と儒教[が導入されること]によって、東アジア文明が形成された。それと同時代にほぼ同じ形で、近東文明はイスラム教を中心として形成され、ヨーロッパ文明はキリスト教を基盤としてその歩みを開始していた。しかし、東アジア文明の中で抵抗の動きもいくつか起きている。中国仏教を全面的には受け入れず、インド仏教を志向したチベット人たちは、やろうとすればできたにもかかわらず、中国の漢字を採用しなかった。チュルク語系の諸民族や、ウイグル人たちも同様であった。10世紀には、契丹族もこれらの例にならった。契丹、党項(タンゲート)、および女真の文化は、主として東アジアの文化的枠組みのなかで発展したのであった。しかし、契丹、党項、女真は、漢字を使用する一方で、まず自分たちの道[を行くこと]を選択した。そして中国文化から始めて、それぞれ独自の文字体系を創造した。

西夏文字は1036年につくられ、西夏王国の正式な文字として導入された。1038年、西夏皇帝の命令によって、漢訳仏教経典を西夏語に翻訳するための作業グループがつくられた。『法華経』は、一番最初ではないにしても、最初期に翻訳された経典の一つであった。12世紀、皇帝仁孝(仁宗)(1139-1193)の治世に完成した法華経写本の序文には、翻訳に関する簡単な歴史が記されている。「この経はインドに出現し、次第に東方の諸国に伝えられた。[後]秦(386-417)の皇帝

のもとで、[漢語に] 翻訳された。[鳩摩] 羅什(中略)。この後、[我々の] 風角城皇帝(李元昊)(在位1031-1048)は、彼の王国の言語を基礎としてリイ(タンゲートは彼ら自身のことをこのように自称していた)の儀礼を導入するに当たり、文字をつくり[この] 経を(西夏語に) 翻訳した。」序文にも、「多くの紛争や戦争がなくなり、善行の数が急激に増え、人々のために傾注される努力は、[以前とは] 比べものにならないほどになった」と記されているように、この経典の翻訳は、すぐに西夏国を益することとなった。

この経典は、何度も複製され、木版本として出版されたと考えられる。1157年に作られた写本が現存している。皇帝仁孝(仁宗)の校訂によるテキストは、Je Wgiuが発注し、Ngwi-ndi Ra-shio-weによって書写された。大いに興味を引かれるのは、皇帝秉常(惠宗)(在位1068-1086)と彼の母である皇太后梁氏の保護のもとで制作された、11世紀後半の木版本である。「経典を大切に考えるもの」という称号をもつ僧侶Wiwo Jie(Gao Hui 高慧)によってテキストが木版の原版に彫られ、印刷された。この木版本は11世紀の特徴的な版本である。11世紀の木版本と12世紀の木版本とでははっきりとした違いがある。まずその違いは「11世紀の版の方が」印刷の質が低いという点であろうか。

このたび、東洋哲学研究所ならびに創立者池田大作先生、川田洋一所長、江藤幸作氏のご尽力により、ロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクトペテルブルク支部所蔵の西夏文『法華経』が発刊されるはこびとなった。釈尊に関わる注目すべき典籍の一つが再現され、敬虔な仏教徒たちは聖典の古資料の一例にふれることができるようになる。西夏学者や仏教学の専門家たちは、文献学的研究のための新しい資料を得ることになる。そして、学术界は、傑出した日本の学究であり、学士院会員の西田龍雄先生による、この新たな業績によって、利益を受けることになるのである。

私は、心から今回の出版を慶賀するとともに、本書が『法華経』の教えを信奉する人々が連帯の絆を強め、日本とロシアの学者間の協力関係をさらに促進し、必要な西夏学の専門家の数を増加させることもできると確信している。本書の出版が世の評価を得て、成功することを願ってやまない。

訳注

- (1) Nevskii, N. A. *Tangutskaia filologiiia. Issledovaniia i slovar' v 2-kh knigakh* [Tangut philology. Research and a dictionary in two books]. Book 1, Moscow, 1960, p. 22.
- (2) Ibid.
- (3) M. G. Morisse. *Contribution préliminaire à l'étude de l'écriture et de la langue Si-hia*. Mémoires présentés par divers savants à l'Académie des Inscriptions. 1 série, vol. XI, Paris, 1904.
- (4) 《西夏譯蓮華經考釋》京都・東山學舎印 1914年。

(エヴゲーニイ・I・クチャーノフ／ロシア科学アカデミー東洋学研究所
サンクトペテルブルク支部前所長)

(本稿は、2005年3月31日に出版された『西夏文「妙法蓮華經」——写真版
(鳩摩羅什訳対照)』の「発刊によせて」を転載したものです)